

「反日と愛国」

2018年05月16日

戦時中、「非国民」と言われた人々がいた。国の将来を思う時、国策に疑義を感じ、反対を意思表示した人々である。彼らは苦難を負い、命までも奪い取られた人々も数多い。しかし、彼らの意思を検証してみると、彼らこそ国を憂う「愛国者」であったと言える。反対に、愛国者たちもいた。国の戦争政策を褒め称え、意気揚々と「国のため、天皇のため」と叫び、押し進める力になった。しかし、敗戦を経験した時点から見ると、彼らは思考を停止し、時流に押し流され、結果的に国を亡ぼすことに与する者たちであった。

現在も、「愛国者」を自負する人々がいる。歴史の事実を検証しようとせず、国が犯した過ちを率直に認めようとするを「反日」「自虐的」と言って否定し、国策の正当性を勇ましく主張している。彼らは強いことを誇りにし、力のない者たちを周辺に追いやり、他国人を根柢のないヘイトスピーチで蔑む。彼らは問うことを止め、事実を直視しない独善的な価値観で暴走している。偏狭で、短絡的な愛国主義者たちの言動は国の将来を危うくするのではないかと大きな不安を感じている。生き生きした創造的な文化は、意見や立場の異なる他者を受け入れる多様な文化が会う中から生まれて来る。

この「反日と愛国」について、ノンフィクションライターの窪田順生氏は『愛国という名の亡国論「日本人はすごい」が日本をダメにする』で、興味深い報告を書いている。反日と愛国は波のように押し寄せたり、引いたりしながら、様々な社会現象を引き起こしている。そのバランスが壊れて「愛国」が強くなり過ぎると、「日本は世界一」「日本礼賛論」が吹き上がってくる。日本人の中の特殊な人を取り上げ、日本人は素晴らしいと持ち上げ、それが、あたかも日本全体であるかのような宣伝をする。テレビの番組で良く見かける。書物においても、世界の人々は日本人に感嘆、敬服しているという本が多く出版されている。また、スポーツ、技能・技術、ノーベル賞などでも、過大な報道で「愛国心」をかき立てるような扱いをしている。世界の現状に比較し、特出すべきことではないのに、歪んだものの見方を生み出す偏向報道をしている。窪田氏は、日本のナショナリズムは「個」と「全体」を混同していると言い、「われわれ日本人は、物事を客観的に判断したり、自分たちに都合の悪い事実を受け入れたりする能力が奪われてしまった」とも警告している。また、「日本人論」を好む意識の根底にあるのは「不安」ではないかと言う。確かに、自信のある人は自画自賛しなくても、事実を受け止める力量を持っているだろう。更に、自画自賛に溺れると、国際社会から孤立していく要因となる「民族至上主義」につながり、社会はファシズム（全体主義）へ傾倒していくと分析している。

終章の「戦前からの『愛国報道』が抱える闇」を読んで、恐怖を感じた。1920年代、朝日新聞は、国際比較を駆使して、日本の強みを強調する論調を展開した。その論調をリードしたのは下村宏氏で、「愛国のマスコミのドン」という存在まで上り詰めた。彼は「国際派」の「スター文化人」として、ラジオや講演で、「日本が世界一の民族になるために何をすべきか」を語り、民族の「質」を向上しなければならないと説いた。そのためには「優れていない」ものを社会から「根絶」すべきであると、精神病者や天刑病（ハンセン病）者を根絶する「優生学」を主張した。田中寛一博士の優生学をベースにした「日本は世界一優秀だ」という主張も国威発揚に利用された。窪田氏は、平成の「日本は特別な存在だ」という「日本礼賛論」は戦前の思想を色濃くひきずっていて、「ろくでもない未来」を招くと結論づけている。「愛国」が「亡国」をもたらす危険の鋭い指摘である。